

地域活性化という「遊び」

36

京都市
福知山市 「みわ・ダッシュ村」から

山本晋也

2月2日は末娘8回目の誕生日でした。

誕生日！というとまさに昭和の子供という子供時代を送った僕なんかは百貨店のおもちゃ売り場の喧騒がパッと頭に浮かぶのですがそういう場所に自分の子供を連れていったことがほとんどありません。こういうところに暮らしていますと石ころとか木の枝とか葉っぱとか



■ 大人が嫌がるひっつき虫でも遊べます。

ちよつと工夫すれば遊べるものはいくらでもあるので

わざわざ車飛ばして百貨店まで行く必要はないと思っています。そうはいっても子供たちは欲しがらるでしょうと聞かれるのですが

いわゆる「おもちゃ」というものを欲しい欲しいと駄々をこねられた記憶は一度もありません。どうしたらそうなるのか？

とカフェにやってくる子育て奮闘中のお父さんお母さんに質問されることも多くなり娘の誕生日やこの原稿のこともあるので久々に深く考えてみました。2日ほどたってふと思ひ浮かんだ言葉が「出发点」。

「あつて当たり前」を疑う
「無いという出发点」

物事はやはり最初が肝心。そもそもおもちゃがないと子供たちは遊べないのかという

実はそうではありません。バックパッカーで世界中を旅して回った20代アフリカで何もないのに毎日楽しそうに遊ぶ子供たちの笑顔をそこらぢゅうで見かけました。旅行を終え



切ったトマトにハートを発見。こういうのはやはり子供が見つけますね。

筆者プロフィール

1968年、京都生まれ。美術大学を卒業して渡米後、京都で現代美術作家として活動。そのかたわらオーガニックレストランを運営するも食材を種から作ってみたいとなり、京都市内で畑を始める。結婚して3人の子供を授かったころ、農業生産法人みわ・ダッシュ村の清水三雄と出会い、福知山市の限界集落に移住。廃屋を修繕しながら家族で自給自足を目指す。土と向き合ううち田畑と山や川、個人とコミュニティーの関係やその重要性に気がつき、田舎も都会もすべて含めた「大きな意味での自給」を強く意識するようになる。この考え方は、美術家時代にドイツの現代美術家ヨゼフボイスのすべての人が参加して創り上げる社会彫刻という概念に影響を受けた。現在みわ・ダッシュ村副村長。

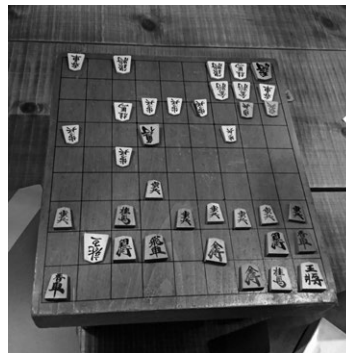
そんな国々から比べるとはるかに裕福で豊かな日本に暮らし始めて遊んで遊んでいるのかなと周囲を見回してみますが

まず外で遊んでいる子供をあまり見かけません。安全に遊べるグラウンドや公園があってもガラガラで大半は家の中でおもちゃかゲーム。画面ばかり見るからか笑顔も何だか少ないような気がします。

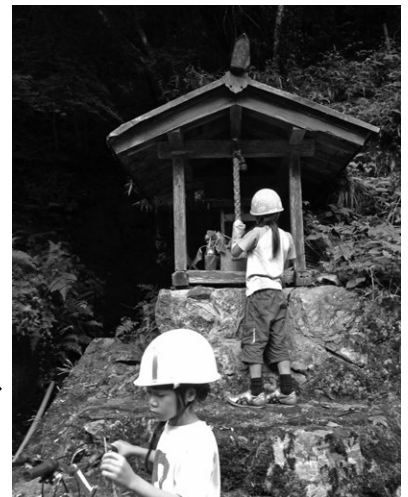
部屋中に散らばり収納に困るほどたくさんのおもちゃがあるのに新製品が出るとみんなが買うので大人も買わないわけにはいかない。

当時の僕にはその光景が遊んでいるというより子供も大人もおもちゃやゲームに遊ばれているようにしか見えませんでした。おもちゃやゲームが

あつて当たり前。
新製品が出たら買うのが当たり前。
食事の時にテレビがついてて当たり前。
それが日本の一般的な子供の「出発点」。
果たしてこれでいいのかな？
日本の子供たちは本当にこれが幸せなのか？
周りに物が溢れていても
「無い」というシンプルなどこから
出発させてやった方がよいのでは
ないだろうか？



↑ 我が家にテレビゲームはありませんがこういうゲームはあります。
→ 毎日お宮さんの水を入れ替えて遊んでいます。



一般的な「出発点」を疑うようになり
ました。
自分で初めての子供を持った時
良い実験台ができた自分の考えを
実行に移すも
親や友達にさえ「おもちゃ無いゲー
ム無いテレビ無いなんて虐待だ！」
と言われ続けました。
しかし次男三男とその考えは変えず
僕の考える「無いという出発点」は
頑固なくらい大切にしてきました。
周りの心配どこ吹く風
子供たちは無いことを楽しみながら



末娘の誕生日に買ったアイスクリームメーカー。早速カフェに来たお客さんの子供と作ってみました。

「出発点」を疑うようになり
ました。
自分で初めての子供を持った時
良い実験台ができた自分の考えを
実行に移すも
親や友達にさえ「おもちゃ無いゲー
ム無いテレビ無いなんて虐待だ！」
と言われ続けました。
しかし次男三男とその考えは変えず
僕の考える「無いという出発点」は
頑固なくらい大切にしてきました。
周りの心配どこ吹く風
子供たちは無いことを楽しみながら

ぐんぐん成長し
年齢に応じて必要なものを揃
えると今度は
畑仕事、山仕事、狩猟、大工
仕事、料理とすごいスピード
で成長し
虐待だ！なんて言ってた親や
友達も
評価を変更せざるをえず
「どうやったたらそんな子にな
るのですか」と逆に聞かれる
ようになりました。
僕が説明しても理解してもら
えなかった「やはり出発点が
大切」ということを子供たち
が証明してくれたわけです。
そんな風に答えると
「うちの子はもう中学生！」
「出発点を間違えていたら今
更どうすればいいんですか？」
ということも同時に聞かれますが
ご心配なく。

「出発点」はいろんな方法で
後から見せることができるのです。
今 回末娘の誕生日に買ってやっ
たのがアイスクリームメーカ
ーです。
家電量販店にて
千円くらいで買った安物で
プロからすると
ただのおもちゃのような機械ですが
良質な牛乳、砂糖、塩、バニラ、生

クリームと、材料さえ本物をキチン
と選べば子供でも
巷のグルメアイスに匹敵するか
もしくはそれ以上の美味しい
アイスクリームができます。
自分で材料を混ぜ合わせ
眼の前でその材料が
アイスクリームに変化していく。
一部始終を目撃し
そのできたてを口にした時の表情は
単純に「美味しい」というより
「アイスクリームの出発点を見つけ
た」という感動で溢れています。
そういう体験をすると
「アイスクリームはプロが作ったも
のを買うものだ」という考えが打ち
砕かれ
「アイスクリームって自分でも作れ
るんだ」
「たったこれだけの材料なのにすご
く美味しい」
「材料が良ければ余分なものはいら
ないね」
「じゃあ良い材料ってそもそもどん
なもの？」
というような「出発点のその奥」を
も探す思考が自然と始まるのです。
「出発点」が見つかる楽しい遊びは
そこらぢゅうに転がっていますよ。
親子で探してみたいかがですか。
そしてその遊びを探すのも
また一つの遊びです。